

Title	個性の認識と文化の解釋(今井貢著)
Sub Title	
Author	淺子, 勝二郎(Asako, Shojiro)
Publisher	三田史学会
Publication year	1930
Jtitle	史学 Vol.9, No.1 (1930. 3) ,p.162- 165
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19300300-0162

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

また氏が、神話を四つに分け、之を一々生活形態を異にせる部族の神話と明言されたのは可成大膽な態度がある。恐らく古代日本において神話組織時代の部族は、文明著しく發達した復合部族であり、之を海原生活と農業生活とが明白に區分することが出来たかどうか疑はしい。この邊は今一應の再考を煩したい。

日本神話は復雜にしてこれを種々なる方面より考察することが出来る。心理學の立場よりかゝる勞作を呈供された氏に感謝すると共に吾々史學者はこれに對し幾分の賛成保留をなさざるを得ないことを惜しむ。(松本信廣)。

個性の認識と文化の解釋 (今井貢著)

著者は昨年二月、二十六才の若さで物故された、本書は、故今井貢氏の遺稿集上巻として刊行せられたものである。

然し乍ら、その第一篇心理學に於ける個性の認識及び附録ディルタイ「解釋學の成立」に就ては、(尤も後者は故人に依て始めて邦文に移植せられたものであるが)筆者はその資格を有せぬから唯第二篇日本古代文化に關してのみ紹介を試むこととする。先づ、第一章文化の個性とその解釋に於ては

ただ與へられた心理學的事實として、精神活動はすべて個人的主觀との關係に於いて性格的である、そしてその精神活動に於いて指向されてゐる、若くは意識されてゐるすべての内容は、その限り個人的に色彩づけられてゐるさいふことを認めればよいであらう、あはれさか、かなしさかすまじさか言ふ言葉はなるほど

各時代を通じて見ても、それぞれの音形式(Lauforn)として見れば、同一であるに違ひないが、それらの言葉によつて指向されてゐる意識内容は、平安朝の人人に於ける現代に於けるのさほちるん同一ではない、(著者は意識内容の恒常假定を極力否定する)枕草紙の作者があはれによつて何を指向してゐるかを、又源氏物語の作者が同じくあはれによつて何を意味せしめてゐるかを明かにすることは、清小納言と紫式部との性格の理解の一步であり又それからの意味形態を現代人があはれによつて意識する意味形態と比較することは、平安びこの精神的特性の理解の一步ともなる。

心理學的事實としての人間の生活經驗は、すべてそれぞれの特殊な仕方ではなされてゐる。そしてその特殊な仕方ではたらく精神の指向性が特殊な意味形態を創造する即ち文化を創造する、中略人間の精神活動は、個人的にも社會的歴史的にも、それらが具體的な經驗的事實である以上は、すべて個性的なものである、言ひかへれば生活經驗はあらゆる方面に於て特殊性をもつてゐるのである。

過去の或文化を解し理解することは、それに於いて文化形態がかつて生きてゐた所の Modus に於いて規定することである。高天原さいふ一つの表象内容は、古代日本人にまつては天つ神たちの神つごひにつごひなる天上の場所である。彼等は現實の地上を人間の住む地よみの國を死者及びあらゆるけがれの集合してゐる地下の暗黒界と考へ、そしてそれに對し光に満ちた澄み渡つた明るい天空を神々のつごひ場所と考へた。そこには彼等の世界觀——自然哲學——の特殊の Modus があるのである。この Modus に於いては高

天原は神々の住所として最も現實的な生きた意味形態なのである
とし、次に

第二章 上代日本人の言語意識

に於ては、上代人のもつてゐた言靈の信仰といふ、特殊な言語意識を分析し、そしてその特殊な意識の様相のなかに於いて上代文學に一つの特色を與へる祝詞（ノリト）の文學的本質を解釋することは同時に彼等上代人の精神生活の輪廓を促へることに何等か役立ち得るやうにも思はれるといふ見地から、上代人にまつては、生活經驗を如何に解し、如何に説明するかといふことは、同時に彼等の行動の動機を決定し、行爲の方向を與へる力となるが、またかかる解釋、説明といふことは言語によらないで、之を表現することは出来ない、ここに於いて、言語といふものが、上代人にまつては重要極る役目を演ずることとなる言葉を用ゐることによつて經驗を或仕方に於いて解釋する、そしてその解釋は、直ちに實際行動の仕方を規定する、故に言葉は、單に客觀化された事物に呼びかける符號ではなくして、言葉が即ち思想となる、人生觀となる、そしてまたそれは行動の原理に外ならない、如何に語るかといふことは、語られたものが如何にあるかを示すので、その限り語るといふことは、ものに客觀性を與へその存在の仕方を運命づけることとなる。

祝詞は言靈の威力によつて、荒ぶる神どもをうつし拂ひ、また世界が調和した運行をなして行くのを促進する、原始的な祝詞はかかる意味をもつたもので、それが後に天つ神、國つ神に對する祈願奏上の形式を取るやうに變つて行つた、前の場合には、人は

神と共にあつた、後の場合には、人は神から孤立した、この區別は見のがす事の出来ない、生活態度の相異であると思ふ、われわれは祝詞を、上にのべたやうな、上代人の特殊な精神生活の様相に於て見て行かねばならない。

上代人の最も原始的な祭式儀禮の本質は、神々に供物をささげ祈禱、禮賛するといふことにあるのではなくて、言葉の力によつて神を天上より、地上に現出せしめ、その神の英雄的行動をたたへることによつて、幸福の齎されることを期待した、といふことにある云々を述べて居られる。

次は、第三章我民族の自我意識であるが、過去のある民族が如何なる自我意識をもつてゐたかと言ふことをしらべるには何云つてもその民族によつて用ひられた人稱代名詞なるものが有力なる材料となるべきであらうとし原始日本語の一人稱代名詞あ、あれ、わ、われ、おの、おのれ、二人稱代名詞な、なれ、三人稱代名詞あ、あれ、か、かれ、を考證し、こに角二人稱な、なれに對し、一人稱と三人稱は大體あ、あれであつたらしい即ち一人稱と二人稱の區別、及び三人稱と二人稱の區別は明瞭ではあるが、一人稱と三人稱との區別は必ずしも明瞭ではない、こにそれの背後に働く民族精神の働きを認められる。

なに對するあは、なが話しかけられるもの、呼びかけられるものとしての意志の對象であるに反し、あは話しかけるもの、呼びかけるものとしての何等かの意志的主觀であつた、そこには意志の一方の端がなとして、他方があとして意識され、その對立は明瞭ではあつたが、しかもそれだけで、意識の全野が占められてゐ

たものではなかつたか、未だそこには自我と汝に對する第三者としての彼の存在が明瞭に意識されるまでに至らなかつたのではあるまいか。たゞへ意識されてゐたにせよ、それは極めて薄弱なもので彼原始の民族にまつては汝に對する自我と汝に對する彼とは必ずしも明瞭に區別して意識せられなかつたのではないか、されば彼等の言葉が二人稱に對し一人稱と三人稱は共にあ若しくはそれに近い母音ウオを以て言ひあらはされて明確な區別なしに使用されてゐたを解せられる、そして彼等の精神の發達が進むにつれて自我と汝に對し特に第三者の存在が明確に意識され注意されて來つて、そこに特殊なる語形をもつた三人稱か、かれが生み出されたものではなかつたか、我原始民族にまつては、自我を三人稱で呼ぶも、第三人者を一人稱で呼ぶもさしたる不自然を與へなかつたのではないか、と

更に多くの言語の發達に徴して動詞は、概ね名詞、代名詞の、状態を示す述語として、その名詞、代名詞から分化したものであると云ふことは、一般に認められてゐるところであるから、我國語の動詞に於て最も重要な役目をしてゐるところのあるといふ自動詞は何等かこのあ又はあれといふ代名詞と語原的關係があるのではないか、と推定して居られる。

第四章 我國上代の社會思想

に於ては先づ日本國家の成立を説き、國家統一前の社會思想は死、病氣に對する驚異の念よりする呪又は魔力の極めて素朴な信仰によつて構成され、國家統制準備時代の社會思想は神道であり民族制度成立後の社會思想は儒教及び佛教であるとし神道、儒教

及び佛教の社會思想史的意義を次の如くに規定せられる。

すべて周代より漢代に至つてあらはれた支那思想は、到底當時の日本人には理解出来なかつた、したがつてこの方面よりしては彼等の社會思想は殆ど影響をうけなかつたと考へられる、彼等は只自己の有してゐるナイーブな信仰を幾分變形して、當時の社會に適應した特殊な宗教思想並びに社會思想を構成したにまじまつたのである、その思想とは何か、即ち「神道」である、神道は實に日本人が純粹につくり出した、幼稚ながら唯一の、哲學思想であり、宗教思想であり、社會思想であるのである。

内面的には經濟生活の推移に伴ふ社會組織變革の要求や、種種の社會問題、例へ土地制度の整理、交通々信の設備、戶籍の調査等の大問題に應ずる古い氏族制度の反省により、既に充分に新しい社會組織への展開が必要となつてゐるところへ、たまたま儒佛二教殊に佛教の思想が人心に投じ強大なる社會思想となつた爲にここに大化の革新は必然的に行はれたのである。

最後に第五章萬葉集に於ける神仙傳説の歌に就いて(附古代日本民族性の一論)に就てであるが、萬葉集に於ける神仙傳説即ち浦島傳説、柘枝傳説、竹取傳説等の諸傳説の起原並に原型は古代日本人の想像活動の所産であるとするもそれらが相傳承されて行く間には次第に異種の傳説内容と混合し殊に神仙譚はその主要素をなして影響してゐるといふこと、しかもこれらの精神活動の進路には自ら特殊の發展がありそしてそこに我々は民族性の問題の一面を窺ふことが出来るのである、と結んで居られる。

以上で大體その要點は言ひ盡したつもりではあるが、著者はそ

の熱烈なる人間的認識の要求のために、神を奉齋すべき家柄に生れながらしかも神を認容することが出来ず、自然科學を棄て、心理學を求めたのであるが、これにも（當時の）満足できず疑惑を抱き煩悶を重ね遂に心理學を實踐的認識の方法によつて確立した人である（城戸氏叙文）それだけに文化の個性とその解釋に於ても特徴があると同時に缺點も亦あらうと思ふ（例へば氏の所謂 Modus はアプリオリに與へられたものであつて、それを規定する基準は何等存しない。高天原さいふ一つの表象内容は、古代日本人にまつては天つ神たちの神つごひにつごひをる天上の場所であるそこには彼等の世界觀——自然哲學——の特殊の Modus があるのである、この Modus に於いては高天原は神々の住所として最も現實的な生きた意味形態なのである、さいはれるが、この特殊な Modus の標準は何であらうか、又この Modus に於いては高天原は神々の住所として最も現實的な生きた意味形態なのであると云ふ事も不明瞭である）。

この方面に興味を持たれる大方に一讀をおすすめする次第である。（四六版本文四一九頁、定價二圓八拾錢、淺草區北仲町二番地故文學士今井貢遺稿刊行會（淺子勝二郎））

校定出雲國風土記

（島根縣皇典講究分所編纂）

出雲風土記の從來の傳本に誤謬多きを慨し、出雲大社々務所内島根縣皇典講究分所においては、大正十年以來その研究會を起し、

二十數種の本を蒐集し、校訂に従事し、前後八年を費して本書を編纂した。解題索引を附し、別に天平時代の出雲國想像圖を附してをる。

記紀が中央所傳に偏したるに對し、風土記は、地方の所傳を採録し、古代の神話信仰習俗を理解するために無盡の資料を呈供してくれることは云ふまでもない。然るに此古典の研究が從來あまりに等閑視され、嚴密な校勘も行はれてゐなかつたことは遺憾であつた。今やその中の出雲國風土記だけでも同地方居住の篤學者の手により校定出版せられたことは悦びに堪えない。かの民俗學上の大問題であり、折口教授によりその名篇「水の女」中に取扱はれた三津郷の條「其津の水沼於（？）而、御身沐浴ぎ坐しき」も「其澤水治於而、御身沐浴坐」となつてをる。次の行の「其水沼出而用ひ初むるなり」も「其水汲出而用初也」となつてをる。校定の結果をもつてたゞちに絶對的に眞なりと見ることには出来ないが各異本の異同を上欄に標記してをるから研究者にまつて取捨撰擇上至極便利である。古代研究に従事する諸彦の是非一本を座右に備へられんことを希望する。（和本半紙版特製本金貳圓普通本金一圓二十錢送料金六錢）（松本信廣）

標註古風土記（常陸）

（栗田寛著 後藤藏四郎補註）

栗田氏の標註古風土記が、同書の研究者に重んぜられてをることには云ふまでもないが最近その價ひが漸く不廉であり、世人は、そ